

環境安全保障論の批判的検討 西ケニア農村における水資源利用の検討に向けて  
A critical investigation on environmental security: towards examination of rural water resource use in Western Kenya

上田 元<sup>1\*</sup>, 大月 義徳<sup>2</sup>

Gen Ueda<sup>1\*</sup>, Yoshinori OTSUKI<sup>2</sup>

<sup>1</sup> 東北大学大学院環境科学研究科, <sup>2</sup> 東北大学大学院理学研究科

<sup>1</sup>Graduate School of Environmental Studies, Tohoku University, <sup>2</sup>Graduate School of Science, Tohoku University

発展途上国における自然資源の希少化が人々の間に争議・紛争を引き起こすと論じる環境安全保障論については、賛否両論が絶えない。その一因は、国単位で集計されたマクロ・データを用いてミクロな因果を論じる研究が多く、それらがクロスレベル推論の問題を引き起こしがちなことにある。そこで近年、紛争の起こった地点を特定してデータのダウンスケーリングを行い、得られた紛争件数を目的変数とし、それを空間解像度の比較的高い環境変数で説明することが試みられている。たとえば東部アフリカの主として牧畜社会については、自然資源としての降水量のデータを説明変数とした一般化線形モデルによって、資源希少化仮説だけでなく、費用対便益仮説や資源豊富化仮説も成り立ちうることを示されており (Raleigh and Kniveton 2012)、通説に再考を迫っている。しかし、こうした先行モデルの説明力は高くなく、方法論上の検討の余地が残されている。そこで本研究では、階層ベイズモデルほかの適用や、空間解像度のより高い説明変数の利用などを試み、紛争と降水量の関係を再吟味する。また、同様の研究を農村社会について行う際に考えるべき点について検討する。季節河川しか存在しないケニア西部の半乾燥地域をとりあげ、その農耕社会にとって重要な生活用水源、家畜用水源である掘り抜き井戸の分布と、その利用、管理、紛争・協調の程度に注目した予察を行う。

キーワード: 環境安全保障, 半乾燥地域, 水資源, ケニア

Keywords: environmental security, semi-arid area, water resource, Kenya